様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００７１３

研究課題名（和文）外国人留学生が行為主体者として求めるグローバル・シティズンシップの検証

研究課題名（英文）Verification of the Global Citizenship that International Students Seek as Actors

研究代表者
永岡　悦子（Nagaoka, Etsuko）

流通経済大学・流通情報学部・教授

研究者番号：４０３３９７３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：国境を越えてヒト、モノ、カネが活発に移動する複雑化した社会において、グローバルな認識をもった「地球市民」としての意識、すなわち「グローバル・シティズンシップ」と呼ばれる資質は、人が行為主体として社会に役割参加をする上で欠かせない能力である。本研究では、特に日本の大学で学ぶ外国人留学生を対象にグローバル・シティズンシップ教育を実践する際に、学習者の特性に応じて優先すべき学習項目を学習者に対するニーズ調査から検証を行った。その結果をもとに、特に留学生にとって学びやすい、グローバル・シティズンシップ教育の教材を作成し、実践を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、日本で学ぶ外国人留学生を対象に彼らが必要とする能力を量的、質的に調査し、その内容を明らかにしたことである。量的調査では、留学生の身分、在日期間、日本語能力、国籍の４つを外部変数として取りあげ、異文化間能力の変数別の傾向を考察した。また質的な調査では、留学生が必要とする異文化間能力に対する意識の形成プロセスの解明を行った。さらに、もう１つの意義は、調査結果をもとに、異文化間能力を育成する教材を作成し、授業実践を行ったことである。調査研究を教育に応用することは、グローバル・シティズンシップ教育の発展につながると考える。

研究成果の概要（英文）：In a complex society where people, goods, and money actively move across national borders, the consciousness of being a " Global Awareness “ , or equivalently called "Global Citizenship," is an indispensable ability for people to play an active role as an actor in society. In this study, we conducted a needs survey of international students to determine which items should be prioritized according to the characteristics of the learners when implementing Global Citizenship Education, especially for international students studying at Japanese universities. Based on the results, we created teaching materials for Global Citizenship Education, especially for international students, and put into practice.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育　外国人留学生　グローバルシティズンシップ　多様性　多文化共生　市民リテラシー　教材開発　SEL

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

OECD の「キー・コンピテンシー」や ATC21 の「21 世紀型スキル」といった、諸外国やプロジェクトが提唱する資質・能力の教育目標は、国立教育政策研究所（2016:24）によれば、「基礎的リテラシー」「認知スキル」「社会スキル」の３分類に整理できる。とくに、「社会スキル」の一部である「異質な集団での交流力（キー・コンピテンシー）」や「シティズンシップ（21 世紀型スキル）」といった「異文化理解」に関わる資質・能力は、グローバル化が進む現代社会において、国・組織・個人といったさまざまなレベルでの異文化コミュニケーション摩擦の解決に役立つ「グローバル・コンピテンシーズ（Global Competencies）」として重要な教育的価値を持つ。今後さらにグローバル化が進み、日本の大学教育においても、「グローバル・シティズンシップ教育（Global Citizenship Education（GCED）」が今後一層重視されていくと思われる。

GCED は、国連においても、2012 年に Global Education First Initiative（GEFI）の１つに挙げられ、ユネスコ事務局でも取り組みが強化されている。UNESCO（2015）では、様々な世界の問題に対する課題(Topics)を「Cognitive(認知)」、「Socio-emotional(共感・連帯)」、「Behavioural（行動）」という 3 つに分類し、それらを学齢の段階に応じた「Guidance matrix（指標）」に「Topics and Learning Objectives」としてまとめ、各国の教育事情に合わせて提供するよう提案している。

世界規模で実施する GCED の概念として、教育の課題や段階を明確に示した UNESCO(2015)は、教育現場に立つ教師への指針として有用な資料である。しかし、様々な国籍や母語など多様な文化的背景をもつ学習者の集う実際の教室においては、学習者の持つ価値観を尊重しつつ、GCED として概念を再構築していくために様々な教育的な配慮をする必要がある。学生の行為主体としての社会参加を促進するためには、学生自身の視点に立ち、グローバル・シティズンシップに対する意識やニーズを調査することが必要であり、その成果は日本の高等教育における GCED のカリキュラム作成に役立つものと思われる。

２．研究の目的

本研究は、日本の大学で学ぶ外国人留学生を対象に、グローバル・シティズンシップに対する学習者のニーズと特性を把握し、教育方法を検討するものである。

国境を越えてヒト、モノ、カネが活発に移動する複雑化した社会において、グローバルな認識をもった「地球市民」としての意識、すなわち「グローバル・シティズンシップ」と呼ばれる資質は、人が行為主体として社会に役割参加をする上で欠かせない能力である。しかし、グローバル・シティズンシップに対する意識や行動は、社会に対する価値観や、言語能力、また学歴によって異なると予想され、時間や環境が限られた中で学習者が等しく修得することは難しい。そこで、本研究では、特に日本の大学で学ぶ外国人留学生にグローバル・シティズンシップ教育を実践する際に、学習者の特性に応じて優先すべき学習項目を学習者に対するニーズ調査から検証を行った。その結果をもとに、特に留学生にとって学びやすい、母語や国籍、学歴等の諸条件を考慮した「グローバル・シティズンシップ教育」の教材や実践案を作成することを目的とした。将来的に外国人留学生と日本人大学生が共に学ぶ、「国際共修カリキュラム」の構築に還元するようにしたいと考えている。

３．研究の方法

（１）量的調査

日本の大学で学ぶ外国人留学生 203 名を対象として、異文化理解に対する記述式のアンケート調査を行った。外国人留学生が日本生活のどこでつまずき、それをどう解決しているか、また彼らがみずから必要だと感じる異文化間能力とは何かについて調査を行い、KH Coder(樋口 2014)を使用した計量テキスト分析を行った。本研究では共起ネットワークによって抽出された話題（概念）を分析する「概観分析」と、外部変数によって抽出された特徴的な語を分析する「特徴語分析」の２つの手法を用いて分析を行った。

（２）質的調査

量的調査で用いた記述式アンケート内容の背景をより詳細に調べるために、東京近辺の私立 A 大学に在学する留学生 5 名（男子 2、女子 3)、及び地方の国立 B 大学に在学する留学生 5 名（男子３、女子２）の合計 10 名で、調査は 2020 年１月に実施された。同様の質問項目を用いた半構造化インタビューを実施し、量的調査で得られた日本で学ぶ外国人留学生にとって必要な異文化間能力について、具体的な事例の回答の背景について聞き取りを行った。

本研究では、木下(2007)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach，以下、M-GTA という）を用いて分析を行い、留学生が必要とする異文化間能力に対する意識の形成プロセスを解明することを目的とした。

（３）教材作成・実践研究

近年、日本では国際化を背景に、多文化共生や異文化理解に関するワークブックや教材が出版されている。しかし、多くが日本人読者を想定して書かれているため、語彙や文章の難易度が高く、テーマや事例も日本人の立場からの設定が中心である。外国人留学生をはじめ、日本語を母語としない人の視点に立ち、日本語と日本文化を学習者の母語や文化と比較しながら、異文化理解を学ぶ実践と教材の開発を行った。本研究では、研究代表者が 2015 年から担当している「リベラルアーツ演習　日本語から異文化理解へ」で教育実践を行いながら、異文化理解に対する教育実践の授業評価アンケートを繰り返しながら、教材の作成を行った。永岡・鄭（2022）、鄭・永岡（2022）の調査の結果から、言語や文化の比較をきっかけとして他者や他者の文化に対する理解や寛容性も高まると同時に、学習者自身の生き方や考え方などの自己理解も深まることが示唆された。

４．研究成果

（１）量的調査の結果から

量的分析では、203 名分を対象に、KH Coder を使用し、共起ネットワークによって抽出された話題（概念）を分析する「概観分析」と、身分・在日期間・日本語能力・国籍という４つの外部変数によって抽出された特徴的な語を分析する「特徴語分析」を行った。

まず、「概観分析」では、設問項目に沿って、(1) 日本留学の意義、(2) 日本生活での問題解決、(3) 日本生活で必要な能力の３つに分けて考察を行った。その結果、日本で学ぶ外国人留学生は、異文化でのコミュニケーション能力の獲得、新たな環境での新たな知識の獲得、そして一人暮らしやアルバイトなどの新たな体験からの精神的な成長を日本留学の意義として認識しており、それらが今後の進路選択に役に立つと考えていることがわかった。また、ほとんどの留学生は日本留学の中で、学業、生活、コミュニケーション上のさまざまな不安を抱えており、その問題解決の方法として、メタ認知を働かせて学習を管理したり、社会的ストラテジーを活用したり、環境や時間などの外的要因にゆだねるなどの方略を取っている。このように、コミュニケーション能力と日本語能力を高め、精神的な成長を促すために、留学生自身が考える日本生活で必要な能力とは、学習を管理するメタ認知能力に加えて、自分から進んで行動する積極性や自立心であり、自らの意欲や態度の重要性を自覚していることがわかった。

次に、「特徴語分析」では、留学生の身分、在日期間、日本語能力、国籍の４つを外部変数として取りあげ、変数別の傾向を考察した。その結果、(1) 身分別の特徴語から、短期留学生の交流重視の傾向や、学部生の勉学と生活の両立、大学院生の研究志向という傾向が見られた。(2) 在日期間別の特徴語からは、積極的な交流活動を望む 1 年未満の群が短期留学生の傾向と重なっていることや、在日期間が長くなるにつれて日本生活で必要な能力へのイメージも具体化していく様子がうかがえた。また、(3) 日本語能力別の特徴語では、日本語能力が低い方で日本語重視の傾向が強い反面、日本語能力が高い方では社会的スキルの重要性を意識する傾向が見られた。最後に、(4) 国籍別の特徴語では、中国・ベトナムの留学生の結果を中心に考察した結果、両群とも日本語能力の重視という共通点がある一方で、とりわけ中国の群に汎用的・社会的スキルについての語が目立つという特徴も見られた。

（２）質的調査の結果から

質的分析では、留学生 10 名に対するインタビュー調査を M-GTA の手法で分析した。その結果、【母国と日本の比較】【日本語学習への気づき】【ネットワークを作る・参加する】【必要とする異文化間能力】【留学のメリット】という５つのコアカテゴリが生成された。このうち、【日本語学習への気づき】と【ネットワークを作る・参加する】は互いに連動しつつ、留学生の異文化間能力に対する意識形成にもっとも密接に関わる要素であり、日本語力の上達とともにネットワークに主体的に参加できた成功体験が、日本留学に対する肯定的な評価につながっていることが明らかになった。

大学で学ぶ外国人留学生は、日本留学における【必要とする異文化間能力】として〈問題発見能力が必要〉〈組織への適応能力が必要〉〈日本人のコミニケーションスタイルを理解する〉〈積極的な姿勢が必要〉だと考えていた。とりわけ【日本語学習への気づき】と【ネットワークを作る・参加する】が、留学生が【必要とする異文化間能力】の形成にもっとも直結していた。すなわち、必要な異文化間能力として日本語能力の重要性を強く意識しているとともに、「言語と文化」「日本語力と人的ネットワーク」との密接な関連性を常に強調しており、その意識が留学生活における態度として表れていることがわかる。

このような生活上の経験は、ほかの領域、カテゴリとも密接に連動し、留学生の意識の変化へと波及していた。まず、【大学の学業への取り組み】【大学教員との交流】【卒業後の進路に対する希望】が、大学での勉学を支える【日本語学習への気づき】と連動していた。また、とくに【母国と日本の比較】【日本へのイメージ】【日本社会への違和感】という３つのカテゴリが、【ネットワークを作る・参加する】【ネットワークに参加できない】というもっとも中心に近いカテゴリと連動しており、ネットワーク作りに係わる留学生の個別体験の結果が母国や日本に対する意識に変化をもたらしている可能性がうかがえた。この３つのカテゴリは相互連動性が強く、1つの領域としてまとめることができた。さらに、【アルバイトでの経験と人間関係】と【異文化での生活】を包摂したもう１つの領域は、学外での人的ネットワーク作りの場となっており、留

学生はそこでの経験を通して異文化間能力の必要性をより強く認識していた。

以上のように、それぞれの概念、カテゴリ、領域が様々な関わり方を通して、外国人留学生が【必要とする異文化間能力】に収斂していく一方で、上述した３つの領域全体が、データ提供者の留学生がみずから【留学のメリット】として語る概念に広く影響を与えている様子も浮かび上がった。たとえば、生活上の困難な場面で、その場に相応しい日本語力を駆使して問題を解決していく中で、〈自立性が身についた〉と認識したり、日本語力の上達とともに人間関係が広がり、その中で〈日本文化や日本人の考え方を学んだ〉と自覚したりする。つまり、留学生は、日本での個人的または集団的なネットワーク作りの中で獲得した態度や意識の変化を、留学生活の成果として自己評価していることがわかる。

分析によって作成した結果図が図１である。図中には、各概念やカテゴリ、領域間の関わり方を、「連動する」「影響を与える」「変化をもたらす」「領域全体が影響を与える」という４種類の矢印を用いて示している。

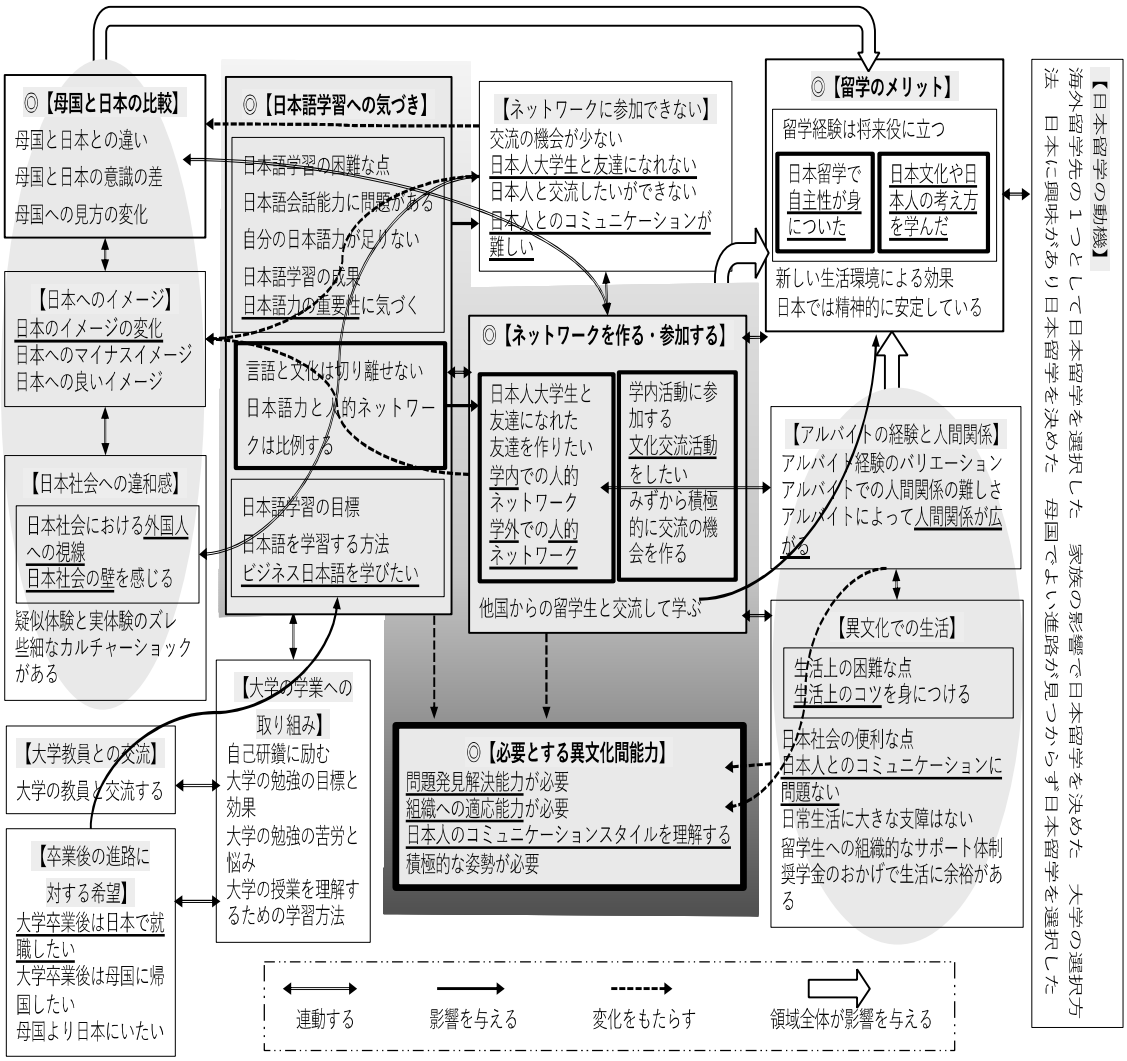

図１　結果図：異文化間能力に対する意識の形成プロセス（鄭・永岡 2022：18）

（３）教材作成・実践研究

研究代表者は、2015 年から留学生対象の一般教養必修科目「リベラルアーツ演習」という科目を担当している（学部 2 年生対象、半期・2 単位）。本科目は全学共通の「幅広いリベラルアーツを学び、来るべき専門教育につなげていく」という目標のもと、「日本語から異文化理解へ」というテーマで日本語・日本文化と海外の諸言語・文化を比較しながら、多様性や異文化に対する理解を深める授業を目指している。永岡・鄭（2022）の量的調査の結果から、外国人留学生が日本留学で必要とする能力として、①日本語能力の向上、②コミュニケーション能力の向上、③日本語、日本文化への理解を深める、④専門分野の能力、社会人基礎力との橋渡し、⑤異文化交流への姿勢、意欲の向上、⑥自立と自己成長の促進を掲げ、令和 3 年度までの授業実践で使用していた教材を今までの研究成果を取り入れながら、より汎用性が高くなるように再編集し、試作版の教材『日本語から異文化理解へ』を作成した。教材は、１学期で完結するよう、90 分授業 15 回分の内容としている。

全体は、「第一部　日本語について考えよう」、「第二部　日本文化について考えよう」、「第三部　言語と文化について考えよう」の三部構成になっている。1回分の構成は、話題提供（本文）とワーク（練習問題１～２問）と、ワークを実施するうえでのヒントから成り立っている。教材は受講生用として授業のパワーポイントのスライドを編集してまとめたスライド版と、教師用としてパワーポイントの内容を解説し、授業中に実施する活動をまとめた解説版の２つに分けて編集した。解説版は主に授業を担当する教員や、授業内容をより詳しく学習したい学生を対象としている。

第一部　日本語について考えよう １　日本語は誰のもの？　２　日本と世界の日本語学習者　３　世界的に見た日本語の特徴 ４　変わる日本語・広がる日本語　５　世界から取り入れた日本語
第二部　日本文化について考えよう ６　非言語コミュニケーションの重要性　７　日本語と日本文化　８　和食と食文化 ９　世界の価値観・異文化受容　10 異文化適応
第三部　言語と文化について考えよう 11 異文化トレーニング　12 異文化理解から多様性との共存へ　13 文化の特徴 14 言語と文化に関する発表　15 世界の架け橋となる留学生

図２　『日本語から異文化理解へ』目次

試用版を使用した実践を行い、その効果を受講生にアンケートを実施して分析したところ、日本語や日本語でのコミュニケーション、日本文化に対する関心が高まったことがわかった。異文化理解については、コミュニケーションゲームが好評であったが、異文化理解に関する理論への興味は他の内容よりも低い傾向が見られた。今後は、理論面だけでなくリアルな交流活動も加えるとともに、具体例のバリエーションも追加することで、内容の改善を図っていきたいと考えている。

参考文献

木下 康仁（2007）『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
国立教育政策研究所（2016）『資質・能力 理論編（国研ライブラリー）』東洋館出版社
永岡悦子・鄭惠先（2022）「外国人留学生が考える日本留学に必要な能力とは―テキストマイニングによる共起ネットワークと特徴語の分析から―」『流通経済大学流通情報学部紀要』Vol.26, No.2, pp137-166
鄭惠先・永岡悦子（2022）「外国人留学生の「異文化間能力」に対する意識の形成プロセス:質的分析を通して見える社会・文化的な相互作用」北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部『日本語・国際教育研究紀要』Vol.25, pp.1-24
樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析: 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
UNESCO（2015）Global Citizenship Education TOPICS AND LEARNING OBJECTIVES
http://unesdoc.unesco.org/images/0023/002329/232993e.pdf
2024年6月13日閲覧

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 永岡悦子・奥村恵子・齊藤真美・芹川佳子・中野玲子・山下千聖	４．巻 27,
２．論文標題 多文化共生社会における市民リテラシー養成のためのワークショップ ： 韓国日語日文学会での議論から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『流通経済大学流通情報学部紀要』	６．最初と最後の頁 159-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永岡悦子・鄭惠先	４．巻 26-2
２．論文標題 外国人留学生が考える日本留学に必要な能力とは―テキストマイニングによる共起ネットワークと特徴語の分析から―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『流通経済学流通情報学部紀要』	６．最初と最後の頁 137-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鄭惠先・永岡悦子	４．巻 25
２．論文標題 外国人留学生の「異文化間能力」に対する意識の形成プロセス ：質的分析を通して見える社会・文化的な相互作用	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『日本語・国際教育研究紀要』	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永岡悦子	４．巻 25-2
２．論文標題 「言葉と文化をつなぐ異文化間教育の試み ―日本語から異文化理解への発展を目指して―」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『流通経済学流通情報学部紀要』	６．最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 永岡悦子	4．巻 24-2
2．論文標題 異文化理解に対する外国人留学生の意識調査ー中国人留学生とベトナム人留学生の比較からー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『流通経済大学　流通情報学部紀要』	6．最初と最後の頁 51-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 永岡悦子	4．巻 1
2．論文標題 リテラシーと異文化間能力：異文化理解に対する外国人留学生の意識	5．発行年 2019年
3．雑誌名 CAJLE2019Proceedings	6．最初と最後の頁 195-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鄭惠先	4．巻 1
2．論文標題 多文化交流型授業における協働作業を通して学生は何に気づくか－ワールド・カフェ・セッションへの分析をもとに－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 CAJLE2019Proceedings	6．最初と最後の頁 126-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鄭惠先	4．巻 34
2．論文標題 【書評】永岡悦子著 大学大衆化時代における日本語教育の役割と可能性 -グローバルシティズンシップの育成をめざした研究と実践の歩み-	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『早稲田日本語教育学』	6．最初と最後の頁 157-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 永岡悦子、奥村恵子、齊藤真美、芹川佳子、中野玲子、山下千聖
２．発表標題 多文化共生社会における市民リテラシー養成のためのワークショップ―日本国外での実践の可能性を考える―
３．学会等名 韓国日語日文学会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 齊藤真美・奥村恵子・芹川佳子・中野玲子・永岡悦子・山下千聖・宮崎里司
２．発表標題 アウトリーチ型日本語教育支援のための市民リテラシーとその育成を考えるワークショップ
３．学会等名 早稲田大学日本語教育学会 2021 年 秋季大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 永岡悦子
２．発表標題 「言葉と文化をつなぐ異文化理解教育の試み ―日本語から異文化理解への発展を目指して―」
３．学会等名 第25回留学生教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 鄭惠先
２．発表標題 「つながりを重視した日本語教育とオンライン協働学習」
３．学会等名 北海道大学令和２年度HUCI＆教育改革室フォーラム
４．発表年 2020年

１．発表者名 鄭惠先・山路奈保子
２．発表標題 「外国人人材育成に向けて大学の日本語教育は何ができるか－「日本語教育推進法」の成立を受けて-」
３．学会等名 異文化meetup week 2020
４．発表年 2020年

１．発表者名 鄭惠先
２．発表標題 「３大学の混成グループによるオンライン協働学習－日本語で世界の課題を話し合おう－」
３．学会等名 バーチャル型国際間交流学習研究会「バーチャルでつながる国際間交流協同学習の実践」
４．発表年 2021年

１．発表者名 永岡悦子
２．発表標題 リテラシーと異文化間能力：異文化理解に対する外国人留学生の意識
３．学会等名 CAJLE (Canadian Association for Japanese Language Education)2019
４．発表年 2019年

１．発表者名 鄭惠先
２．発表標題 多文化交流型授業における協働作業を通して学生は何に気づくか－ワールド・カフェ・セッションへの分析をもとに－
３．学会等名 CAJLE (Canadian Association for Japanese Language Education)2019
４．発表年 2019年

１．発表者名 永岡悦子
２．発表標題 「多様性と教育―市民教育の視点から考える―」
３．学会等名 2022年度北海道大学高等教育機構国際教育部研修事業，多文化交流科目 オンラインシンポジウム，「『多様性』を再考する：多文化交流科目の10年」
４．発表年 2023年

１．発表者名 永岡悦子
２．発表標題 「日本で学ぶ留学生のための異文化理解教育の実践と教材の開発―授業評価アンケートの分析から見えてきたもの―」
３．学会等名 第13回国際日本語教育・日本研究シンポジウム　香港大学　専業進修学院（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計3件

１．著者名 永岡 悦子	４．発行年 2022年
２．出版社 流通経済大学出版会	５．総ページ数 378
３．書名 大学大衆化時代における日本語教育の役割と可能性	

１．著者名 青木　麻衣子、鄭　惠先	４．発行年 2023年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 240
３．書名 国際共修授業	

１．著者名 青木麻衣子・奥本素子・朴炫貞・小林由子・式部絢子・髙橋彩・鄭惠先・平田未季	４．発行年 2021年
２．出版社 北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部	５．総ページ数 95
３．書名 『国際教育研究部 ブックレット６ これからの国際共修教育を考える―コロナ禍におけるオンライン授業実践―』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鄭　惠先 (Jung Hyeseon) (40369856)	北海道大学・高等教育推進機構・教授 (10101)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関